

第 21 回秋田県理学療法士学会趣意書

整形外科治療の最前線

—整形外科医は理学療法士になにを期待しているのか

近年、少子高齢化が急激に進み、秋田県の人口は、今後 20 年間で 80 万人以下に減少し、高齢者数が 30 万人程度になることが見込まれている。かつては脳卒中県といわれ、リハビリテーション診療においても脳卒中に代表されるチーム医療が展開されてきた。依然として寝たきり、要介護の原因疾患として脳卒中が上位を占め、難渋するケースもある。いっぽう脳卒中などの生活習慣病ではない高齢化に伴う疾患では、運動器疾患が急増し、骨粗鬆症関連疾患、変形性腰椎症、および変形性関節症が多い。しかも疾患そのものが重症化、多発化、複合化するという特徴があるため、複数以上の関節で煩わされている症例に遭遇することもある。関節疾患は要支援の原因の第一位であり、施設居住者のみならず通所リハビリ利用者にもみられ、他職種連携が求められる。関節疾患に対する治療は、運動機能の改善にとどまらず、生活機能に直結する。治療方法は日進月歩である。特に変形性関節症に対する関節外科においては手術手技、材料の進歩、リハビリテーションによる優れた長期成績がいわれている。患者さんの期待は、『良くしてもらおう』ことよりも『治してもらおう』ことにある。われわれはこの期待に応えているであろうか。周術期に関連したマニュアルやガイドブックも発刊されているが、効果のある技術を身につけているであろうか。本学会では、第一線で関節外科治療にあたっている整形外科専門医に理学療法士に求められている関節外科前後の理学療法について呈示いただく。